

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520825

研究課題名（和文） 南ラオスのゴム園開発と地域住民の社会文化変化に関する研究

研究課題名（英文） Study on the development of rubber plantation and sociocultural changes of the locals in Southern Laos

研究代表者

中田 友子（NAKATA TOMOKO）

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：50508398

研究成果の概要（和文）：

ベトナムのゴム会社とラオス政府主導で開始されたゴム・プランテーション開発による、地域住民の社会文化的変化は、実際には開発主体が予想あるいは期待したような農民から労働者への単純な移行という形では表れておらず、むしろ従来ほぼ自給してきたコメを継続して栽培するための外部も含めたさまざまなネットワークやその他の現金収入源の模索という形で表れている。そこには労働環境や雇用条件だけでなく、文化的な要因が作用していると考えられる。

研究成果の概要（英文）：

Sociocultural changes of the locals that have been brought about by the rubber plantation project launched by the Vietnamese rubber companies and the government of Lao PDR, are revealed not to be a transition from peasants to laborers, as expected by the authority, but to be the pursuit of various networks with a view to continuing rice production or of sources of income in order to purchase rice which they used to produce by themselves. Certain cultural factors, as well as working environment and employment conditions, are relevant to this situation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：

キーワード：開発、文化変化、南ラオス、ディスポジション、戦略

## 1. 研究開始当初の背景

研究対象の地域は、すでに98年～99年に1年間、フィールドワークを行った場所であり、その地域で05年から大々的なゴム・プランテーション開発が行われていることを

知り、かつての文化的、社会的な状況に大きな変化が起こることを予想した。

## 2. 研究の目的

南ラオス、チャンパサック県バチアン郡に

において展開されるゴム・プランテーション開発プロジェクトが地域に与える影響について、特に地域住民の文化的社会的変化に焦点をあて明らかにすることにより、地域社会・文化と整合性をもった開発のあり方を探ることを目的とする。

### 3. 研究の方法

フィールドワークによる質的調査分析を行った。年度につき、2回、それぞれ2週間程度調査を行い、インタビューや観察などによりデータを収集した。

### 4. 研究成果

3年間に計6回の現地調査を通して、以下のことが明らかとなった。

(1) ゴム・プランテーションが地域住民の経済活動に与える影響の変化について

焼畑を中心とする農地のほとんどを失った住民たちは、当初はゴム会社が各世帯にゴム植林した土地を数 ha ずつ割り当て、管理させたため、これによる労働報酬と、その土地でゴムの木の間に陸稲を栽培することで、生計を成り立たせていた。

その2~3年後からはゴムの木が大きくなり、さらには陸稲が栽培できなくなり、さらにゴム会社が各世帯に割り当てた土地を回収し、直接雇用した労働者に管理させるようになったため、住民たちは突然、主要な生活の糧を失うことになった。

ゴム・プランテーションの労働者として雇用されるには年齢制限（18~35歳）があり、土地を失い、さらには応募できない住民たちは何らかの別の手立てを考える必要に迫られるようになった。

かつて自給していたコメを買うための現金を得るため、労働者になれない住民たちは以前よりも頻りにバナナの葉を市場へ売りに行き、さらに木炭を生産して売ったり、あるいは屋根葺き用の草を刈って売るなどするようになった。

コメ生産に関しても、これをなんとかして継続しようと、村の外の親族や知り合いに頼って土地を確保しようとする動きが目立つ。

ゴム・プランテーションの労働者として雇用された住民たちの定着率は必ずしも高くない。なぜなら、乾季には仕事がほとんどなくなり、収入が激減するからであり、また家族が稲刈りなどで人手を必要としている期間に、これを手伝うためにゴム園の仕事を長期間休むと解雇されるからである。ほかにも、給料の額や支払い日などをめぐり、さまざま

な不満が住民の間にはくすぶっている。

ごく一部の住民は、ゴム・プランテーション開発が開始した時点で完全にコメ栽培をやめてしまい、トラクターやトラックを使った運送業に乗り出した。

以上のように、全体的には従来のコメ作りに対する執着が色濃くみられる。ゴム・プランテーションの存在が、会社や郡当局が当初もくろんでいたような、農民から労働者への単純な移行を促すものではないことがわかる。ゴム・プランテーション開発は、焼畑を禁止し、自給自足的な生活をやめさせ、その代わりとなる、経済的により豊かな生活につながる生業を提供するという国家的な目論見のもと、開始されたものであったと考えられるが、実際には決してその目標をかなえるものとはなっていないことが少なくとも現時点では明らかである。

その大きな原因は、ゴム会社が住民たちにとって安定した労働と収入を提供してくれる存在とはなっていないからである。雇用労働者に対する条件（年齢制限、他）や年間を通して不安定な労働日数は住民の大きな不信感を招くものとなっている。

### (2) 社会・文化的変化

農業、特に焼畑での陸稲栽培が極端に減少することにより、これにともなう労働交換なども減少し、村落内部での住民間の相互扶助の重要性も低下することが予想された。確かに、わずかな面積での陸稲栽培がかつてのような大々的な労働交換を必要とせず、そのため実質的にはこれがあまり行われなくなっていることは否定できない。

その一方で、親族間の結びつきは逆に強まっていると感じられるケースもある。これは特に主食であるコメが極端に不足していることによる、「(コメの) 欠乏の共有」に認められる。つまり、かつては家から独立すれば、別の米倉をもって、別の生計をたてるのが通常であったが、どの世帯もコメが自給できない現在、余剰ではなく、ごくわずかにあるコメを近い親族間で分配し、欠乏を共有しようとしているのである。この場合、独立した世帯、生計を象徴する米倉はほとんど意味をもたず、たいていの世帯は収穫したコメを袋に入れたまま、家屋内に入れる。

ただし、同じ村内部では土地に関して互い依存できないため、外部の親族の所有する水田などを共同で耕すといった世帯もある。この場合は、村落内のネットワークではなく、外部のネットワークを利用するというこ

であり、その分、村内部の親族との結びつきは相対的に弱まっていることがうかがえる場合もある。

村内部の資源やネットワークを利用するのか、あるいは外部のこれらを利用するのかは、世帯それぞれの状況により異なるが、確実に言えることは、かつてのような相対的に均質的な経済活動やこれに伴う生活スタイルが徐々に多様化しつつあるということである。

また、コメ栽培の重視、そしてコメ栽培のための労働の重視は従来とあまり変わっていないと考えられる。なぜなら、ゴム園の労働者だった住民が解雇される最大の理由が、家族の農作業を手伝うために長期間欠勤したことだからである。彼らにとって、今もコメ作りが最も重要であり、その価値を単純にゴム園の労働による現金収入と比べることはできないのだと考えられる。

ゴム会社にとっては不満であろうが、このような文化的背景を念頭に置くことなく解雇することにより、労働者の不足が起きているのであり、また実際に起きている。さらにゴム会社は労働力の不足を外国人労働者（特にベトナム人）によって補いたいとし、ラオス政府に対して外国人労働者の雇用条件の緩和を求めているという話を聞くが、このことがますます地元住民たちがゴム会社に対して抱く不信感を増大させることにつながっている。というのは、住民たちの語りのなかに何度も、不法にゴム園で働いているベトナム人労働者の話が登場するからである。彼らがときどきラオス警察の手入れによって捕まり、本国へ送り返され、ゴム会社も罰金を払っているという話が住民たちの間に広まっており、実態は明らかではないが、このような語りまことしやかに広がっているという事実そのものが、地元住民たちがゴム会社に対して抱いている感情を反映していると考えられるのではないだろうか。

### ③ゴム・プランテーション以外の変化

調査当初はゴム・プランテーションのみに注目していたが、実際にはこれ以外に複数の開発プロジェクトが実施されていることがわかった。特に貧困対策プロジェクトとして行われているものがあり、機織りや料理などの講習が行われ、一部の女性たちがこれに参加している。さらに、自主的に数キロ離れた職業訓練学校へ通って縫製などを学び、これによって収入を得る女性たちも出てきている。機織りに関しては、その技術を習得するにはかなりの年数が必要と考えられ、現在のところ実質的な成果が目に見える形で現れ

ているとは思えないが、縫製に関しては、村で女性たちから「シン」と呼ばれる伝統的なスカートの仕立てを依頼され、実際に一定の収入を不定期であっても得るようになってきている若い女性が存在することを確認している。このような女性の存在が今後、周囲の女性たちに与える影響という観点からも、このような小規模なプロジェクトが若者たちの職業選択に与える影響にも注目していく必要があると感じる。

開発とは直接関係ないが、文化変化という視点から、宗教祭祀にも目を向ける必要があるだろう。顕著なのは、仏教寺院の行事に参加する住民が以前より増加しており、それは仏教徒を名乗らない人々の間にも見られることである。非仏教徒が仏教儀礼や行事に参加することは、10数年前にもすでに観察しているが、現在はその人数がさらに増加しており、このような実践がごく一部の住民に限られるものではなっていることが明らかである。一例を挙げるならば、村の守護霊祭祀を司る宗教的職能者（もちろん非仏教徒）が、数ヶ月前に亡くなった息子の供養のために、寺の儀礼に参加し布施を行うということが起こっている。そのほかに、村の守護霊祭祀のもう一人の祭司であった長老が亡くなったのを機会に、その家族が仏教に改宗し、これに続く家族が出てくるなど、住民たちの間に自主的な改宗が広まる気配を見せている。これが精霊祭祀から仏教への改宗の一般的な動きとして単純に見ることができないことは、逆に仏教から精霊祭祀へと戻る動きも一部に見られることにより、指摘できるだろう。したがって今後も注意深くこの動きを見守る必要がある。

いずれにせよ、このような宗教祭祀に関わる文化変化は、開発の諸要素が置かれたより大きな社会文化的コンテクストを把握するためにも見逃すことのできない現象であると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

①中田友子「南ラオスの開発と地域住民の文化変化に関する予備的考察」『神戸外大論叢』査読無、第60巻第4号、2009年、71～95

②中田友子「南ラオスの農村開発と地域住民の文化変化」『神戸外大論叢』査読無、第61巻第3号、2010年、13～40

③中田友子「開発と家族戦略の多様化—南ラオスの一農村の事例から」『神戸外大論叢』査読無、第62巻第1号、2011年、75～103

〔学会発表〕（計 2 件）

①Tomoko Nakata 'Economic Development and Lifestyle in a village in Southern Laos' *Third International Conference on Lao Studies*、査読有、2010 年 7 月 14 日（at Khon Kaen University）

②中田友子 「南ラオスのゴム植林プロジェクトと地域住民—チャンパサック県バチアン郡の事例から」、日本ラオス学会第一回研究大会、査読無、2012 年 3 月 10 日（於アジア経済研究所）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中田 友子 (NAKATA TOMOKO)  
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：50508398

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし